



TITLE:

李娃傳の構造

AUTHOR(S):

小南, 一郎

---

CITATION:

小南, 一郎. 李娃傳の構造. 東方學報 1990, 62: 271-309

ISSUE DATE:

1990-03-31

URL:

<https://doi.org/10.14989/66714>

RIGHT:

# 李娃傳の構造

小 南 一 郎

はじめに——人物形象論の限界……………	二七一頁
一 登場人物の性格的な不一致……………	二七六頁
二 下降から上昇へ……………	二八四頁
三 「李娃傳」の三重構造……………	二九一頁

## はじめに——人物形象論の限界

我々が小説を読む場合、多かれ少なかれ登場人物に思い入れをすることがあり、自から主人公に重ね合わせて喜んだり悲しんだりするのが、小説的文藝の最も素朴な楽しみ方だと言えるであろう。作品をもう少し離して読む場合にも、ある登場人物は好もしく思うのに、別の人物を毛嫌いしたりするのは、作品中の人物を我々と變わるところのない一個の人格を備えた人間だと、少なくとも心理的にはとらえているからである。こうしたことは必ずしも同時代の小説を読むときだけの心理現象ではない。古い時代の小説を読むに際しても同様であって、たとえば「紅樓夢」の登場人物たち、林黛玉、薛寶釵や賈寶玉などの主人公たちについてのみならず、王熙鳳、晴雯、史湘雲といったわき役についても、あたかも親しい友人の思い出を語るかのように、彼女はあの時こんなことをした、この時にはあんなことを言ったと人に語ることができるのである。このような小説の基本的な享受法に對應しているのが、小説を分析するさいに廣く用いられて來た人

物形象論だと言ってよいであろう。その方法は、小説中の人物のそれぞれについて、我々と基本的に變わるところのない一個の人間だという前提のもとに、その行動や思想についてさまざまに論評を行なおうとするものである。<sup>(1)</sup>

たしかに人物形象論はなほ朴素な方法ではあるが、それゆえにその適用範圍も廣いと言える。ただその缺點として、この方法が安易に使用される時、ある人物を一つの言葉で總括してしまうことになりやすく、特にそれがさらに抽象化されて、善人と惡者、進歩的人物と頑固な反動派といったレッテルが貼られてしまうとき、勸善懲惡を目的とするキャンペーンの手段として政治的には意味があるにしても、小説中の人物が持っていた人間としての幅が失われ、文學とは無縁の議論になってしまいがちである。それゆえこの方法を用いるに際しては、登場人物の特定の側面だけを切りとって論ずるのではなく、その人物の存在の全體を掬い取るための細心の工夫が必要なのである。

しかし登場人物の存在の全體を取り上げるとは、言うは易くとも、實際には至難のわざである。また實際の作品の中に一人の人物の「全體」が直接に描き込めるわけでもない。考えてみるに、小説作品の中にあって、ある人物の存在は、その人物に關する直接の記述だけから規定されているのではなく、その人物の「人間性」あるいは「全體性」は、むしろ他の人物たちとの關係の持ち方の網の目の間から浮かび上がって來るのだと言えよう。それゆえ人物形象論も、登場人物を個別的に取り出して、それに分析を加えるだけに止まらず、いくつもの人物の形象が互いに結ぶ關係性に目を注いで、その關係性の構造の分析へと、理論を深化させる必要があるであろう。小説がその筋書きを展開させるのもまた、主としてそれら登場人物たちが結ぶ關係性の上においてなのである。

人物形象論をより深化させることが、文學としての小説研究を進展させるための重要な課題であるにちがいない。ただ、こうした人物形象論を基礎にした分析方法をいかに深化させようとも、それだけで、一つの小説作品中における登場人物の存在意義の全てが説明されるわけではない。その説明できない部分が、少なくとも二つはあるであろう。その一つは、

人物形象論は登場人物の存在の意味を専ら小説作品を通して架構される、すなわち表現が外に向かつて焦點を結んだ、社會的な關係の比喻から説明しようとするものであるが、登場人物は、同時にまた小説的表現様式の内部にあって、物語りを物語り自體として展開させるために必要な機能をそれぞれに分擔しているという面がある點である。そうした役割りに強いて名づければ、登場人物たちが備える、小説内部における「生態學的機能」とでも言えようか。最も分かりやすい例を取れば、明清の長編小説における男性主人公たちの小説中における主要な役割りがそれである。

中國近世の長編小説の男性主人公たちは、おしなべてみな「影が薄い」という印象をあたえる。「西遊記」の唐三藏、「水滸傳」の宋江、「三國演義」の劉備らは、いずれも優柔不斷で、明確な人物像を結びにくい者たちである。例外のようである「金瓶梅」の西門慶も、あくの強い悪人のように見えながら、案外に讀者の心中にその人物像がはっきりと浮かび上がってこないのではなからうか。さらに、一人の文人によって、はっきりとした創作意識をもって作りあげられた「紅樓夢」の中にあってもまた、主人公の賈寶玉はその存在感がいささか希薄なのである。これら近世の長編小説がそろって「影の薄い」人物を主人公に設定していることについては、偶然にそうなのではなく、そうでなければならぬ必然性があったからだと考えられる。そうしてその必然性は、文學的な内容が要請したものではなく、主人公が「強い」人物であるとき、それら近世の長編小説が物語りとして展開するための支障となったからだと推定される。

古代的な長編敘事詩は、強烈な個性を備えた一人の主人公が、種々の困難に遭遇しながらも、それを克服しつつ前進してゆく姿を描くものであった。そうした人物像は、長編敘事詩をはぐくんだ「英雄時代」の社會關係が必然的に生み出したものであったと言えよう。これに對して、明清の長編小説を生み出した中國近世社會の人間關係は、それと大きく異なるものであった。その異なる點を一言で言えば、古代の人々の社會認識があくまでも自己を中心点に置き、そこを原点とする座標軸の遠近の上に他者がそれぞれに意味を持って配置されているというものであったとすれば、近代の人々の對他

認識は、自己が座標の中心にあらねばならないとする信念はすでに失われ、自分とまったく同じ重さを持つ他人が、自己との距離には特に大きな意味もないまま、その周圍に散在しているというものに變質していた。古代の、自己を世界の中心に据える對他認識に對應するのが、強烈な個性を備えた人物を中心に社會が動いてゆくとする長編敘事詩であるとすれば、近代人の對他認識はそうした長編敘事詩の内容とはそぐわないものとなっていた。自分と全く同じ重さを備えた他人が存在しているとする認識と對應して發達して來た文藝形式が、近代の戯曲であり小説であったのである。舞臺藝術に典型的に見られるように、限取りをし、きらびやかな衣装を着せて、主人公の存在を強調はしても、舞臺に登る人物たちは、善人も惡人も突き詰めればみな同一の大きさを持った存在なのである。近代の、自己の絶對性を主張できない人々の人間認識が、こうした形態の藝術の中に自己の表現様式を見つけて、それを展開させたことは、人間精神の發展史から言っても必然的なことであつた。世界のどの文化圏にあつても、市民社會の成立と演劇の文學としての展開とが時期的に重なっているという事實は、このように考えればその必然性を理解しやすいであらう。

近代の小説もまた、古代の敘事詩と異なり、近代人の對他認識を反映して、それぞれに等しい重さをもった登場人物たちの關係性の上に展開する。それゆえ、主人公が強い個性を備えて強力に物語りを展開させてゆくといった構圖は、近代の小説にはなじまぬものであつた。唐三藏の人物像の變遷にも見られるように、元來は自己の力で多くの困難を克服しつつ取經の旅を續ける人物であつたろうが、その物語りが明代に「西遊記」として定着される時、様々な個性を持つ弟子たちち圍まれて、かれ自身は優柔不斷の弱々しい人物に變わってしまった。かれがそうした人物に變質したればこそ、それぞれに特色ある弟子たちの人物像を引き出し、それらを相互にからみ合わせる事ができたのだと言えよう。同様に百八人の英雄たちを束ねる宋江も、なぜ英雄たちに心服されるのか良くわからないような人物であればこそ、多くの英雄たちの活躍をその周圍に展開させることができたのである。かつて水滸傳批判の政治運動の中で、宋江の性格について様

様な悪口が浴びせられ、我々もかれについてどうも不可解な人物だとの印象を懷くのは、かれが果たす、作品内部での機能、その文學的な人物像と分離して考えないことに原因するのだと言えるであらう。

このように、明清の長編小説の中心人物たちは、正面を向いて活躍するのではなく、もっぱら虚なる中心の役目を果たすことによって、かえって物語りを存分に展開させることができた。それゆえ、逆に生半可に主人公が正面に出て來てゐる作品は、必ずしもできが良くないのである。これら狂言回しの役目に徹する主人公の人物像には、社會的な背景を持った人物形象というよりも、作品の内部的機能を果たす「小説生態論」的な面が強かった。そうして、これら男性主人公の場合ほど明確にその生態論的な役割りが表われぬ場合にも、小説の登場人物たちはみなそれぞれに同様の側面を兼ね備えており、そうした面は、純粹に文學的な視點からする人物形象論では覆いきれないものであったのである。

小説の登場人物たちは、さらにもう一つ、人物形象論では十分に扱いきれない側面を持っている。それは、それぞれの登場人物たちが、その作品で始めて生み出されたのではなく、多かれ少なかれ過去にその來歴を持っていたことに由來する。先行する文藝作品を承けつつ、それに新しい要素を加えて形成された作品の場合はもちろんであるが、特定の作品を繼承したものではない作品にあつても、その内容の多くの側面を過去の文藝的な傳統におつてゐる。そうした傳統を基礎にせねば作品を形成することができず、もしたとえ傳統をまったく無視した作品が書かれたとしても、その作品は讀者の理解を得ることができなかつたのである。現代の小説にあつても、もし過去に小説的な文藝の傳統が全くなく、小説を讀むための約束事が確立されておらなければ、讀者にはどのように讀むべきかの枠組みが得られず、作品の理解は不可能となるにちがいない。とくに古い時代の小説作品は、おおくの約束事を過去から引き繼いでいたのである。このように、たとえ一見個性的に見える登場人物たちも、實は少なからず過去からの因縁を持っていたのであり、逆にそうした遺産を引き繼いでおればこそ讀者たちの理解が得られたのであつた。ただ、それら過去からの因縁は、しばしば登場人物の形象論

的な統一に混亂を持ち込み、物語りの流れに不整合をもたらすことになる。特に時代が隔たって、背景にあった約束事が忘れられてしまったとき、そうした過去からの遺産に由來する人物像の矛盾は、讀者の理解を阻害する要素としてはたらく。この小論では、こうした、人物形象論では十分には扱えない第二の點について、唐代の傳奇小説の一篇「李娃傳」を取り上げて考えてみようとするのである。

### 一 登場人物の性格的な不一致

唐代中期、白行簡によって作られたとされる「李娃傳」は、唐代の傳奇小説を代表する作品の一つであり、その筋書きに基づいた戯曲がいくつも作られるなど、後代への影響も大きかった。(なお「李娃傳」は、元來は「汧國夫人傳」と呼ばれていたであろうと推定されており、その説が正しいと思われるが、ここでは通稱に従って「李娃傳」と呼ぶ)。その粗筋を、簡単に纏めて示せば、次のようである。

唐の天寶年間のこと、常州刺史の榮陽公には、年を取ってからもうけた息子がいて、すぐれた才能を持つことから、父親の寵愛を一身に集めていた。その息子（鄭生と呼ばれる）が、二十歳になったばかりのころ、秀才に推舉され、長安に出て科擧の試験を受けることになった。父親は多額の資金をあたえて、鄭生を都へ送り出した。

長安についた鄭生は、布政里に宿を定めた。ある日、鄭生が東市を見物した歸り、平康里の鳴珂曲（曲は小路をいう）を通りかかったところ、ある家の前に、美しい女性が侍女を傍にして立っているのを見かけた。その女性に心を引かれた鄭生は、長安の事情に通じた友人に尋ね、そこが遊女の李氏の宅だと知ると、他日、その家を訪れて、家の一部を借りて住みたいと申し入れた。女性（李娃と呼ばれる）の母親（李娃の假母）はそれを許諾し、鄭生を招き入

れて李娃と會わせた。鄭生と李娃とは互いに相手に心引かれていることを語りあい、假母も鄭生を婿と認めた。

鄭生は、人々との交わりを避けて遊里に沈淪し、遊興の日々を過ごした。一年餘りがたつと、鄭生の貯えは底をついた。ある日、李娃が、子供を授かるよう祈るため、竹林神に参ろうと誘った。その歸途、李娃は、宣陽里のある立派な屋敷に鄭生を案内し、伯母の家だと告げた。そこで休息しているとき、假母が急病だとの知らせがあつて、鄭生をそこに残して、李娃は先に家に歸った。夕方になり、鄭生も李娃の家に戻ったところ、門は閉まっており、すでに引越しをしたあとだと告げられた。やむを得ず付近で一晩を過ごした鄭生が、翌朝、宣陽里の伯母の家に駆けつけてみると、そこも一時的に貸したもので、借り主はどこかへ行ってしまったと言う。

行きどころの無くなった鄭生は、かつての布政里の宿に戻った。宿の主人は哀れんで一旦は迎え入れたが、鄭生が重い病氣に罹ると、自分のところで死んだりされては困るを考え、かれを凶肆きやうし（葬儀屋のシンジケート）に送り込んだ。

凶肆の人々は、哀れんで共同してかれに食事をあたえた。やがて鄭生はやや回復すると、葬儀屋の手傳いをして日々の生活費をかせいだ。

長安には、もともと東西二つの凶肆があつて、互いに勢力を競い合っていた。その二肆の長が約束を結び、五萬錢を賭けて互いの葬儀用品や挽歌の優劣を競い合うことになった。長安城中央の天門街に靈柩車や葬儀の調度を陳列してその華麗さを競そい、やがて挽歌の歌較べとなった。鄭生は東肆に雇われて挽歌を唱い、その悲痛な調子は聞く者の心を動かした。鄭生の働きによって東肆は勝利を収めることができた。

ちょうどそのころ、鄭生の父親が會計報告のために都に出て来ており、この葬儀屋の競争を見物に出かけた。父親に付いていた老僕が、挽歌を唱ったのが鄭生だと氣付き、強引に鄭生を連れて來ると父親に會わせた。父親は、家門



を辱めたと行って鄭生を責め、曲江の西、杏園との間の地に連れてゆくと、着物を剥いで馬の鞭で鄭生を無數に打ちたたいた。鄭生の息が絶えると、父親はそれを捨てて去った。

凶肆の長は、鄭生が打ち殺されたと聞き、人をやってその死體を埋葬させようとした。しかし心臓のあたりに温かみが残るところから、見守る内に、少し息が通うようになった。やがて生き返ったが、一カ月になっても手足が動かず、傷跡が膿み爛れて汚くて仕方がない事から、凶肆の人々は鄭生を道端に捨てた。鄭生は、ごみ捨て場の土窟の中に住み、乞食をして生命をつないだ。

ある冬の大雪が降った朝、鄭生は飢えに迫られて、雪の中を乞食をして歩いていた。たまたま安邑里の李娃の家の前を通りかかると、李娃は鄭生の聲を聞き分けてかれを家に迎え入れた。假母は鄭生を家に入れることに反対をしたが、李娃は道理を説き、相當の金額を拂って假母とは別れ、別に家を借りて住み、鄭生を手厚く看護した。一年すると、鄭生はもとの身體に戻った。

李娃は鄭生に科擧の勉強を續けるようにと勵まし、様々な援助と指導とを行なった。三年の後、鄭生は科擧の試験を優秀な成績で通った。李娃はさらに勵まして學習を續けさせ、大比（皇帝が特別に行なう、人材拔擢のための試験）が行なわれると、鄭生は直言極諫科に應じて、策名第一の成績を上げ、成都府参軍の職を授かった。

鄭生が任地へ赴くことになったとき、李娃は、自分は身を引くので、この上は立派な家柄の女性を妻に迎えるようにと勧めた。鄭生は、李娃と別れることをがえんじなかったが、李娃の決心は固く、そこで劍門まで同行して別れるという約束をした。

劍門まで来たところで、鄭生は、たまたま成都尹・劍南採訪使となっていた父親と再會をした。事情を聞いた父親は、鄭生が李娃と別れることを許さず、二人を正式に結婚させた。妻となった後の李娃は、家の内を立派に治め、鄭

生が貴顯の位に昇るとともに、李娃も汧國夫人に封じられた。四人の息子がいたが、みな大官となった。

以上が「李娃傳」の粗筋であるが、その最後に、この物語りを著すことになった由來を、筆者自からが次のように記している。<sup>(4)</sup>

わたしの伯祖は、かつて晉州を治め、戸部に轉じ、さらに水陸運使となったが、この三つの役目はみな鄭生と前後して就任したものであった。そうしたことから、この事についてひそかに通じているのである。貞元年間のこと、隴西の李公佐と語りあい、女性の立派な行動についてランクづけをしたことがあったが、その際、わたしは汧國夫人のことを話した。公佐は、掌を打ち耳をそばだてて聞き入り、わたしにこの物語りを「傳」となすようにと命じた。そこで筆を執って、一々それを書きつけたのである。時に乙亥の歳の秋八月、太原の白行簡しるす。

この物語りの中で大きな役割りを果たしているのは、鄭生与李娃と、それに鄭生の父親の三人である。ただ人物形象論的に見る時、彼ら三人の性格には、それぞれに前後矛盾し分かりにくい部分がある。それに比べれば、わき役ではあるが、李娃の假母の性格は、鄭生与李娃とを引き會わせ、鄭生が資金を蕩盡したとき追い出しを計り、乞食となってやって來た鄭生を家に入れまいとするなど、現實的な利益をあくまでも追求するという點で、前後一貫していると言えるであろう。

鄭生は、當時の大族である、滎陽の鄭氏の若君である。しかも父親が老齡になってやっと成人した息子として、氣ままに育つたであろうことは想像に難くない。始めて李娃を見て心を引かれたあと、次のようなやりとりがある。<sup>(5)</sup>

そこで祕かに、その友人で長安での遊びに通じた者に尋ね、事情を詳しく聞いた。友人が言った、「そこは遊び女の李氏の宅だ。」「鄭生が」言った、「あの美人は手に入るであろうか。」答えて言った、「李氏にはいささか財産もあり、以前そこに通つて來ていた者たちは多くが貴顯や大族であつて、たくさんものを贈られている。百萬錢を積ま

ぬかぎり、その心を動かすことはできない。」鄭生が言った、「全くなわぬことではないかと心配していたが、そうではないのであれば、百萬錢などいささかも惜しくはない。」

いかにも世間に怖いもののない大家の若君の言葉である。世間知らずであるだけ、純粹でもあると言えよう。かれは、李娃との戀愛に純粹であり、また同時に簡單に人の言葉を信じて行き所を失うことにもなるのである。

そうした鄭生は、逆境に陥ったとき、現實的に有効な手段を講ずることができず、ひたすら自からの悲しみを人に訴えかける存在となる。鄭生が、葬儀屋の仲間に加わり、挽歌に長じたのも、自からの境涯を嘆く氣持ちをそれにこめたからであった。長安の天門街で行なわれた、東西二肆の葬儀屋の歌合戦でも、彼が表わす悲しみの深さで人々を感動させたのだとされている。鄭生が挽歌を唱う場面は、次のように記述されている。<sup>(6)</sup>

「西肆の長は」そこで、廣場の南隅に低い台を重ねて置いた。そこに長い髻<sup>ひげ</sup>をたくわえた人物が、鐸<sup>すず</sup>を手にして進み出た。護衛の者數人が付き従っていた。やがて髻を振るわせ眉を揚げ、腕組みをし頭を傾かせて臺に登ると、白馬の曲を唱った。これまでに負けたことなどないと自負し、左右をねめつけて、人を人とも思わぬ様子であった。「側に付いている者たちも」聲をそろえて褒めはやした。當代の第一人者で、誰にも負かせられはせぬと思ひこんでいるのであった。しばしあって、東肆の長が北隅に低い臺を連ねて置いた。黒い頭巾の若者が、五六人に付き添われ、さし<sup>さ</sup>ばをさしかけられつつ、登場した。それが鄭生であった。衣裝を整え、おもむろにいづまいを正すと、聲を調えたが、いかにも弱々しげな様子であった。やがて薤露の章を唱いだした。聲は澄み透って、響きは木々を震わせ、曲が終わらぬ内に、聴衆たちはすすり泣いて面<sup>おもて</sup>を覆った。

このように、逆境の中にある鄭生は、その弱さゆえに人々の悲しみと同情とを引く存在であり、人々の一方的な好意がなければ生きてゆけないものとして描かれている。

そうした鄭生は、境遇の激變に直面する時、内に大きな憤りを懷きつつも、それを十全に表わすことができない。たとえば、李娃とその假母との計略にかかり、歸るべき場所を失ったとき、「鄭生は怒りの氣持ちがつのり、夜明けまでまんじりともできず」、さらに布政里の宿舎に歸った後も、「主人は哀れんで食事を進めたが、鄭生は怒りをつのらせて、絶食すること三日、病氣にかかつて病態が重くなつた」とされている。また乞食をする途上、李娃と再會した際には、鄭生は李娃から呼びかけられると、「憤りがつのって昏倒し、口にはなにも言えず、ただ頷くのみであつた」とあり、ここでも憤激に壓倒されて無能になる彼の姿が描かれている。

このように激情を内に懷きながら、それを現實社會に向かつて有効に發揮できないという鄭生の特徴的な性格は、必ずしもこの物語りの筋書きが不可缺なものとして求めるものではないように見える。物語りの展開からすれば、彼はひたすら弱く現實に對して無能であれば良いのであつて、彼が内に秘めている激情は、この物語りの本筋とは別のところに由來したと考えてよさそうである。

鄭生の父親にも、前後で性格の不一致がある。前半では、鄭生の將來に大きな希望をかけて長安に送り出し、その鄭生が葬儀屋仲間にな身を落としていることを發見すると、鄭生を引きずり出して、曲江池の側で、馬鞭で打って半死半生にする。それが良いか悪いかは別にして、門閥貴族の當主としてありそうな人物像である。ところがその父親が、科擧に通つて任官した鄭生と再會すると、こんどは人が變つたように溫情深く、李娃とは別れると言っている鄭生を叱つて、二人を正式に結婚させている。遊女を息子の正妻にすることを嫌わぬほどの庶民的な感覺の持ち主であれば、なにも鄭生が葬儀屋の仲間にな身を落としているからといって打ち殺そうとまでする必要はなかつたはずである。放蕩息子を溫かく家に迎え入れればすんだであらう。この後半の父親の性格は、作りごとめいて現實味が乏しいのであるが、そうした性格の前後不一致の由來するところを考えてみる必要がある。

李娃もまた、前半と後半とで性格が異なるように見える。最も大雑把に言えば、前半の李娃は鄭生の戀人としての性格が強いのに對して、後半の李娃はあたかも母親であるかのように振る舞っている。そして前半の李娃も、一方では鄭生に誠を盡くす戀人であつて、一年餘りの遊蕩の果てに鄭生が持つて來た資金を全て失つたとき、「假母はだんだんと鄭生を粗末に扱うようになったが、李娃の氣持ちはいよいよつた」とされているのではあるが、しかし一方では巧妙にか、ごぬけ、詐偽を行なつて、鄭生をまいてしまふのである。伯母の家と稱するものを使つて、李娃とその假母とが鄭生を追ひ拂つたことについては、これは假母の計略であつて、實は李娃はそれに反對していたのであるといつた、李娃の辯護論もある。しかしそれは現代の感覺からする、李娃は無罪であつてほしいとの思い入れにもとづく都合のよい解釋であつて、元來の「李娃傳」の内容からは逸脱した読み方である。たとえば、借りた家に鄭生を案内して、そこを伯母の家だと言いつくろう場面には、次のようにある。

李娃が車を降りると、年配の婦人が迎えに出て言つた、「どうして久しくお見限りだったのですか。」二人は互いに顔を見合せて笑つた。李娃は鄭生を紹介して挨拶をさせた。挨拶が終わると、そのまま西の戟門（武具が備えられた立派な門）の中にある一方の庭に入つた。中には築山や亭があり、竹や木が生い茂り、池に臨んだ建物はいかにも俗世を離れたという風情であつた。鄭生が李娃に尋ねた、「これは伯母さん個人のお宅なのですか。」李娃は笑つて答えず、別のことを言つて紛らわせた。

このように李娃は十分な餘裕を持つて鄭生をあしらっている。こうした表現からも、彼女が、假母から強制され、心ならずも鄭生を欺いたのではないことは明らかであろう。

一方で、鄭生がその資金を蕩盡したときにも、李娃の心は變わらなかつたと言いながら、他方で彼女は、何等の罪惡感も無いようにして、鄭生をさらなる苦境におとし置いている。しかもその李娃が、後半では鄭生の更生のために心を盡く

すのである。こうした李娃の性格を、人物形象論によって統一的に理解することはいささか困難であろう。あるいは李娃は、鄭生に對するひどい仕打ちを後悔して、後半では彼のために身を捧げたのだとする説明も可能であるかも知れない。しかし李娃の實際の行動で見るかぎり、そこに後悔と罪の償いなどという動機があったとは見えず、もっとほがらかに鄭生のために盡くしているのである。あるいは乞食をしている鄭生を家に迎え入れようとし、反對する假母に對し、

かれは良い家柄の若者です。かつて立派な馬車に乗り、高價な身なりをしてわたしの家に來たのですが、一年にもならぬ内にすっからかんになってしまいました。その上、あなたと二人して計略を設け、かれを捨てて追い拂ったのですが、人間として爲すべきことではありませんまい。かれの志をだめにし、人々からも對等には扱ってもらえぬような立場に落としてしまったのです。父親と息子との關係は、天性のものであります。そうした父子の情を立ち切り、「父親が息子を」殺して捨ててもかまわぬといった氣持ちにまでさせてしまったのです。加えて、かれがこんなにもひどい境遇に落ちたのは、みなわたしのためだということを、天下の全ての人たちが知っておるのです。かれに親しい者や親戚たちが朝廷には多數おります。もしある時、權勢を握る者がこうした次第をじっくりと調べることにでもなったら、わざわざいを被ること、避けようありません。ましてや天を欺き人に背いたのであれば、神々のご加護もないのです。わざわざ凶事を招いたりしてはなりませんまい。

と言っているが、これも假母に對する説明であって、こうした倫理的・功利的な理由だけで鄭生を助けたのではなく、やはり李娃の鄭生に對する深い愛情がそうさせたのであるに違いない。

李娃の鄭生に對する愛情は、この物語り全體を通じて變わることがなかったと考えるてよいであろう。しかしその愛情は、物語りの展開のなかで、それぞれの場所に從って違った形を取って表わされるのであり、ある場合には李娃の愛情が十分に有効には働かないこともあるのである。李娃の人格的な統一性を越えた別の論理がこの物語りの基本的な構造となつて

いたであろうことが推測されるのである。

## 二 下降から上昇へ

前章において、「李娃傳」の主要な登場人物たちにまつわる人格的な不統一は、この物語りににおいて、人物形象論的な統一性を越えた、より優勢な別の論理が働いていたことに原因するであろうとの推測を述べた。その優勢な物語りの論理とは、最も分かりやすい形で言えば、鄭生の境遇に關しての、前半の下降と後半の上昇という、物語り展開の基本的な枠組みが絶對的な力を持っていることである。前半部分における鄭生の運命は、いくつかの段階を経ながらの、一方的な下降の過程にある。科擧に優秀な成績で通ることを期待されていた鄭生が、李娃とめぐり會ったことから遊興の巷に沈淪することとなり、やがて所持した資金を蕩盡して李娃の家からも追い出されたあと、鄭生は次々と轉落の過程をたどる。住むべきところを失ったかれは、布政里の宿の主人の好意で一旦は落ち着き場所を得るのであるが、やがてそこからも追われ捨てられて凶肆の仲間に入ることになる。凶肆の人々の好意で生活の糧が確保できるようになったのもつかの間、かれはこの凶肆からも追われてさらなる轉落を重ねる。このように物語りの前半部分は、鄭生の境遇の轉落と小康、そうしてさらなる轉落といった、階段狀の下降過程を詳細に述べることにその語りの主眼があったのだと言えよう。これに對し後半部分では、長安の街の中を乞食をして歩くところを李娃に發見されて以後、彼女の援助で科擧に合格し、官位を授けられて、やがては高位高官に昇り、子孫も繁榮するなど、鄭生の境遇の、一本調子の上昇過程が記されている。ただ後半部分の記述が前半ほどには詳細でないことは、注意するに値いしよう。この物語りの基本的な立場が、後半の上昇過程を支える士大夫階層の立身出世志向にはあまり熱心ではなかったことを象徴的に表わしていると考えられるからである。

「李娃傳」の最も基本になる構造は、鄭生の境遇の、前半部分における下降、後半部分における上昇という對照的な過程の記述にあった。たとえ李娃がいかに鄭生を愛しても、前半部分にある限り、その愛は鄭生の轉落を防ぐことができない。むしろ李娃は、鄭生を愛することによって、かれに轉落への道を開き、さらには假母といっしょになってその轉落を速めるようなこともしているのである。この部分においては、李娃の愛情といった人間的な要素の發動を越えて、鄭生の境涯は下降過程にあるのだという大命題が物語りの全てを支配しているのだと言えよう。後半の、鄭生の境涯の上昇過程に入ってはじめて、李娃の愛は現實的に有効性を發揮することになるのである。鄭生の父親の性格が、前半部分と最後の部分とで大きく異なるように見えるのも、同様にこうした物語りの枠組みの構造と關わるところが大きく、下降過程にある鄭生に對しては、父親はことさらに厳しく振る舞い、上昇過程にあるかれには、打って變わって溫情的なのだと考えられよう（もちろんこれだけでは父親の行動を十分には説明できず、なお考えねばならぬところが多いのではあるが）。

それならば、こうした「李娃傳」の大きな構造が下降から上昇へと變化する轉折點となっているのはどの部分なのであろう。「李娃傳」が持つ大きな構造については、すでに妹尾達彦氏の論文「唐代後半期の長安と傳奇小説」の中に詳しい分析がある。<sup>(10)</sup> 妹尾氏は、「李娃傳」のそなえる大きな構造を長安という都市の構造に密接に關連させて理解しようとしているのである。すなわち、長安の街を大きく東半分（街東）と西半分（街西）とに分け、東半分は官僚的な文化に彩られた區域であり、西半分はそれと對照的に庶民的な生活が主體となる區域であることを指摘した上で、主人公鄭生の境涯の變轉がこうした長安の都市としての構造と密接に關連しているとして、この物語りに構造的な分析を加える。主人公が身を置いている、長安の街全體の中での位置が、直接に主人公のそのときの境遇を象徴しているとするのである。單純化して言えば、街西地域にすることが主人公の境遇の轉落を象徴し、街東地域にあることが主人公の境遇の上昇を象徴すると考える。そうして、こうした前提の上に立って、この物語りの轉折點は、天門街における東西兩肆の歌くらべの場にあると



する。天門街が、長安の街を街東と街西とに分けて南北に走るメイン・ストリートであったからである。

この妹尾氏の主張は、興味深いものではあるが、いさか理に落ちすぎたきらいがないでもない。たしかに一つの都市の内部には様々に性格を異にする地域があつて、小説の中にそうした地名が出るとき、それぞれの地域について人々が懐く共通の觀念を有効に使うのは當然のことである。現在の京都で言えば、老大家の大學教授は、たとえモデルになった人物が四條河原町に住んでいたとしても、やはり小説の中では北白川に住むなどしないと老大家らしからぬのである。長安の街についても、その東半分、中でもその北の部分が山の手の高級住宅地であるのに對して、西半分が庶民的な下町であつたろうことはすでに多くの人々が指摘しているところであるが、ただ「李娃傳」の物語りの展開の中で、街西部分が街東部分と對照になるほどの重みを持っていたかどうかについては疑問がのこる。たとえば、鄭生が始めて長安に到着したとき、街西の布政里に宿を定めたことについて、妹尾氏は、「布政坊は、異國情緒を湛えて富と財の蠹く、猥雜で繁華な街西西市の近くであり、且つ首都の巨大な官廳街に接しており、ここを導入部の地とすることで、主人公が帝都・長安の都市生活に入り込んだことを印象付け、後に、主人公が街西の下層社會の中に轉落してゆく伏線も敷かれる」と解説するのであるが、このように全てが一つの視點から説明付けられるものかは疑問であり、またその説明が正しいかどうか、確證が取りにくいのではなからうか。また妹尾氏は、その理論的な前提から、最初に鄭生を迎え取った凶肆は西肆であつたと強調するのであるが、少なくとも「李娃傳」の本文には、東西兩肆の區別は明確にされず、凶肆全體の人々がかれを哀れんだのだと書かれている。

もし長安の街の構成を視點にして考えるのであれば、鄭生が最初に李娃と住まいする平康里も、のちに假母から離れて二人して生活する安邑里も、さらに鄭生が李娃にだまされた、伯母の屋敷がある宣陽里も、ともに街東に屬していることからして、むしろこの物語りは、街東地域に視點をすえて語られたものであつたとすべきであらう。天門街における凶肆

の競争で東肆が勝利を収めることになるのも、そうした基調の上に展開する筋書きであつたと理解できる。そうしてこの作品が街東地域を基本の舞臺とし、おそらく街東地域に優越性を認めるであろう心情の上に成り立った物語りであることは、より廣く言えば、傳奇小説というジャンルの文藝作品が、その内部に多分に民衆的な要素を取り入れてはいても、完全には都市生活者たちの物語りではなかつたことを象徴的に表わしていると言つてよからう。

妹尾氏の異説はあるにしろ、鄭生の境涯がどん底にあるのは、やはり曲江池のそばで父親に鞭打たれてから、乞食をするところを李娃に發見されるまでの間であつて、そこを轉折點として物語り全體が下降から上昇へと大きく展開するのだと考えられよう。そうして、その轉換を可能にしたのは、主人公の擬制的な死と女性によるその救済であつた。鄭生が曲江池の側で父親から鞭打たれる場面は、次のように描寫されている。<sup>(1)</sup>

父親は鄭生を責めて言つた、「こんなでたらめな生活態度を取つて、我が一門を辱めてくれた。なんの面目があつて、ふたたび顔を見せることができるのか」。そう言うなり、徒歩で外に出て、曲江の西、杏園の東まで行くと、かれの衣服を剥ぎ取り、馬の鞭で數百回、打ちたたいた。鄭生は、苦しみにたえず、息が絶えた。父親は、かれをそのままに捨てて去つた。凶肆の親方は、鄭生と特に仲が良かった者に命じて、密かに後を付けさせていたのであるが、その者が歸つてきて仲間<sup>(2)</sup>にこのことを告げると、みなは鄭生のために悲しみ嘆いた。二人の者に命じて、葦のむしろを持つて行つて、埋葬をさせようとした。行つてみると、心臓の下に少しだけ温かみが残っている。そこで介抱をしたところ、久しくして、かすかに息が通うようになった。そこでみんなして擔いで歸ると、葦のストローで飲物を口に注ぎ込んだ。一晩して、やつと生き返つた。

おそらく物語りの筋書きの論理としては、父親も凶肆の人々もそう思つたように、鄭生はここで一度、死ぬのである(原文でも「斃」と書かれている)。主人公の男性が死ぬことによつて物語りは大きく展開し、それ以後、はじめて女性の

力が有効に働くこととなり、主人公は女性の手をかりて救われるのである。「李娃傳」の、鄭生の境遇が轉落から上昇へと變わる轉折點は、大きくは曲江地における父親からの折檻から李娃との再會までの部分にあるのであるが、さらに限定をして言えば、その中でも、曲江池の西での主人公の「死」の部分こそが、この物語りの轉折を動機づけたのだと考えられる。鄭生が凶肆と深い關わりを持つことも、あるいはこの物語りの發展の古い段階において、主人公の死という重要な要素の周邊で形成され展開した一節に基づくものであったのかも知れない。すでに諸家の引くところであるが、唐代の長安の街の葬儀屋グループについては、「獨異志」(太平廣記 卷二六〇)の次のような物語りが参考になる。

李佐は、山東の名族であつたが、幼い時、安史の亂のため、その父親が行く方不明になつてゐた。のちに京兆少尹となると、彼はひそかに父親を搜した。父親を見知つてゐる者がいて、葬儀用品を賣る店に居た父親を迎え取つた。それからしばらくして、父親は、葬儀屋の仲間に挨拶をしたいと言ひ出した。李佐がそのために宴會を準備すると、挽歌を唱う者たち百人が集まつた。夕暮がたになると、彼らは李佐の父親をながいす榻に乗せ、挽歌を歌いながら運び出し、そのまま行く方知れずとなつた。

こうした物語りが士大夫層の間で語り傳えられた背景については、なお十分に解明されてはいない。ただ次のようなことが確認できるのではなからうか。すなわち、長安における葬儀屋のグループは、普通の生活者とは異なる一つの世界を形成しており、ひとたびその世界に關つた者は、結局はこの日常世界に戻れないのである。普通の都市住民にとって、凶肆の世界は象徴的に「死」の世界を表わすのであつて、ひとたびその冥府において「よもつへぐい」をした者は現世に適應する能力を失うのだと言えよう。

「李娃傳」においても、鄭生が凶肆の仲間に加わるとき、彼は象徴的に死者の世界にあつたのだと言える。しかも、そうした死の象徴は單に大衆心理的な象徴であるに止まらず、以下に分析を加える、この物語りの基礎となつた元來の古い

傳承にあったであろう、主人公の死という一節にその來源を持っていたのである。元來の物語りの、主人公の葬送を述べる部分が、傳承の中で變形されて、主人公のほうが葬送儀禮の主要な實施者の一人となつてしまつた。鄭生が天門街で挽歌を唱うのも、實は元來は自からの死を傷むものであつて、彼がそこで感情を高ぶらせるのも當然のことだと言えよう。そうして、このような死の世界にある主人公を救ひ、現世に連れ戻すためには女性の「愛」が不可欠だとされた。

橋本堯氏は、『李娃傳』のモチーフ」と題する論文<sup>(2)</sup>の中で、日本の中近世に流行した説教節の諸作品、なかでも「しんとく丸」と李娃の物語りとが少なからざる共通性を有していることを指摘している。たしかに、主人公の若者の境遇の急な没落と女性の獻身によるそこからの救出という大きな枠組みは、兩者に共通しているのである。とくに、鄭生はその零落の底において病苦を患ひ乞食をしているのに對し、しんとく丸は癪に犯され乞食をし餓死に瀕するのであつて、二人の若者がそのどん底で苦しむ境遇において類似している點からも、この二つの物語りの共通性が印象づけられるであろう。橋本氏は、この共通性を兩者がともに貴種流離譚のモチーフの上に成り立っていることに求めている。

貴種流離譚は、たとえば日本古代のササノオの物語りに見られるように、高貴な出身の年若い男性が、その安住の地を追われて苦難のさすらいをする物語りであつて、そのさすらいを見守る女性、あるいは女性神がいるのが通例である。そうして、この彷徨する英雄の物語りは、單に日本において、その苦難の流離に人々の熱い涙が注がれただけに留まらず、廣く世界各地に同様のモチーフの傳説が発見される、おそらく人類共通の物語りの枠組みの一つだと言えるのである。ただ「李娃傳」の物語りを流離譚と呼ぶについては、鄭生の境遇に流離の要素があまり認められぬことから、いささか違和感がある。また一般の貴種流離譚では、李娃の物語りの最もの基礎となつている若者の死とその復活という筋書きが必ずしも不可欠のものではないように見える。そうしたことから、李娃の物語りは、貴種流離譚と重なる部分を持ちながらも、それとはいささか異なる來源を持っていたと考えたい。その來源は、貴種流離譚よりもより古い神話的な傳承にあるので

あって、貴種流離譚も、おそらくは、そうしたきわめて古い傳承が展開して示したさまざまな様相の一つを取りこんでいるのである。

石田英一郎の代表的な論文の一つ、「桃太郎の母」<sup>(13)</sup>は、日本における水邊の小童の傳説の分析から始めて、子神とその後姿を見せる母神との信仰について、アジア、オセアニアからヨーロッパまで、廣く資料を集めて論じている。さらにそうした母神が古く遡ってゆけば多産豐饒をつかさどる原始母神にまでたどり着くのであり、子神は穀靈としての性格を持っていたであろうことについては、同じく石田英一郎の「穀母と穀神——トウモロコシ儀禮をめぐるメキシコの母子神」の論文が、古代メキシコのアズテック文明の儀禮を中心にして論證する。母神と子神とは、母子であると同時に戀人どうしの關係にあり、子神が敵對者のために殺されると、母神は嘆き悲しむが、やがて子神は母神の手によって復活するのである。この劇的な構造を備えた物語りは、原始母神と穀靈とをその主人公としていふことから知られるように、植物（特に穀物）の冬季における「死」と春季における「復活」とを象徵化したものだとして推定される。この死んだ穀靈を復活させる母神の物語りは、人類共通の最も基本的な物語りの構造として、さまざまな文化圏でさまざまなバリエーションを生み出した。たとえばエジプト神話の、セトの手で殺され、ばらばらにして各地にばらまかれたオシリスの死體を、一片一片と集めてまわるイシスの物語りがそれであり、十字架に掛けられ殺されたキリストを膝に置いて悲しむマリアのピエタの像も、同じ太古からの文化的な傳承の上に形作られた作品であろうと石田英一郎は推定している。

おそらくは「李娃傳」の基本構造の内、最も古い層は、同様の神話的な傳承にでるものであろう。たとえば、鄭生が李娃に再會して救われるのが、嚴寒期の降雪の中であるのも、冬季における穀靈の死（そうして母神に救われて春に復活する）という古くからのシナリオと無關係ではなかったと考えられる。鄭生が父親に打ち殺されるのが曲江池の近邊の地であるのは、母神が子神を抱いて現われるのが多く水邊の土地であることと思ひ合わせる必要があるかも知れない。鄭生が葬

儀屋の仲間に加わるのは、オシリスが冥府の支配者でもあったことと考え合わせれば、鄭生にも、その傳承を遡れば、冥府と關係を持つ者という元來の性格があったからであろう。そうして、この物語りの中で李娃が、鄭生の戀人であると同時に母親らしい性格を備えているのも、古い大地母神の傳承に由來するものであったと理解できる。鄭生の父親は、物語りの展開の中で大きな役割を果たしながら（特に前半では、子神の殺害者としての役割を果たしている）、鄭生の母親がまったく出現しないのも、李娃がかれの母親の役目をも兼ねて擔っていたからだと考えることができよう。

もし、いくつかの假定を含みつつ、以上に述べて來た推論に大過が無いとすれば、次に検討せねばならないのは、このような古い神話的傳承が、どのような經路で唐代の傳奇小説に流れ込んで、その基本構造を形作ることとなったのかという問題である。

### 三 「李娃傳」の三重構造

「李娃傳」が、當時の民間の語り物藝能と密接な關係を持っていたことを具體的に論證したのは、張政烺氏の「二枝花話」の論文であつた。<sup>(16)</sup> 唐代の傳奇小説がなんらかの形で民間文藝との交流の上に展開したであろうことは多くの人々が推測するところであるが、そのことが傳奇小説の代表的な作品について實證的に示されたのは、この「李娃傳」がほとんど唯一の例であり、その點からも、張政烺氏の指摘は貴重である。張氏の論旨を要約して示せば、次のようになるであろう。

元稹が友人の白居易に送った「酬翰林白學士代書一百韻」の詩に、若い時代の、長安における二人の交友を述べた、次のような二句がある。

翰墨題名盡 光陰聽話移

翰墨は名を題するに盡き 光陰は話を聽くに移る

この句に元稹は自注を付して、次のようにいう。<sup>(17)</sup>

白樂天は、いつも私と遊びを共にし、至る所の建物の壁に名前を書き付けた。またあるとき、新昌里の家で一枝花の物語りを語るのを聞いた際には、寅の刻から巳の刻までかかって、その物語りは終わらないのであった。

ここに新昌里の家とあるのは、長安市内の白居易の家で、白居易がそこに住んだのは貞元十八年（八〇二）から元和元年（八〇六）の間であったと推定される（ちなみに、花房英樹「白居易年譜」<sup>(18)</sup>は、新昌里の家に移ったのは、元和三年、白居易が左拾遺の官を授けられてからであるとする）。その新昌里の家で聞いた一枝花の物語りとは、李娃の物語りのことである。そのことを證するものとして、宋の曾慥の「類説」卷二六上が収める陳翰「異聞集」中の「汾國夫人傳」には、その最後に陳翰が付したと考えられる、次のような注語が見える。<sup>(19)</sup>

「この作品は」古くは一枝花と呼ばれた。元稹の「酬白居易代書一百韻」にいう（以下、だいたい文字に亂れはあるが、元稹の自注と同じ内容の語が引かれる）。

すなわち、この注語から、「李娃傳（汾國夫人傳）」と内容を同じくする民間の語りものが「一枝花」と呼ばれていたことが知られるのである。なお羅燁の「新編醉翁談錄」癸集卷一に収める「李亞仙不負鄭元和」には、その冒頭に、「李娃は、長安の娼女である。字を亞仙といい、もと一枝花と呼ばれた。滎陽の鄭生、字は元和という者がいて、科擧に應ずるために長安にやって来た……」<sup>(20)</sup>とあり、それを承けて明の周憲王の戯曲「李亞仙花酒曲江池」でも、李娃の名を一枝花だとしているが、これは陳翰の注語を読み過った結果なのだと、張氏は考える（ただ、この點については、李娃が一枝花と呼ばれたとする民間の傳承が「異聞集」とは別にあつて、宋代や明代の戯曲小説にそれが受け継がれていたという可能性も否定はできないであろう）。

張政烺氏の論文の中でも眼目になるであろう一段を譯出すれば、次のようである。

陳翰は唐末の人で、元稹・白居易から時代的にそれほど隔たつてはいない。その彼が、「汧國夫人傳」は古く「一枝花」と呼ばれたと言うのであるから、きつと據り所があつたに違いない。白行簡は白居易の弟である。その彼がこの「傳」を作つたのは貞元十一年であり、元稹と白居易とが新昌里の家で「一枝花」の物語りを聴いたのは、それから七・八年たつた後のことであつた。「傳」の文章は全部合わせて三千五百餘字であるが、物語りを語つた者は、寅の刻（午前三時から五時まで）から巳の刻（午前九時から十一時まで）までかかつて、まだ語り終えることがなかつた。このことから、當時の物語りの語り手の技術が、すでにきわめて進歩しており、思うに物語りを述べたるとき、「傳」の文章にはなかつた多くの言葉が付加されていたのであろう。宋代の物語りの語り手たちは、しばしば唐代の人が著した小説を種本として話本を作り上げているのであるが、上の例から見れば、そうしたやりかたは唐代の人が小説を著すときにも、すでに同様であつたのである。

この張政娘氏の論文は、唐代の傳奇小説が民間の文藝をその基礎としていたことを論證したものとして、しばしば引用される。ただ張氏の主張は、まず白行簡の「李娃傳」が著述され、その數年のち、その「傳」を敷衍した「一枝花」と呼ばれる民間文藝が行なわれていたというのであつて、一般にこの論文が引用されるとき、民間の文藝が先にあつて、その内容を要約し、文言でうつしとつて「李娃傳」ができたという主張ではないことに、注意しておく必要がある。すなわち張氏は、「李娃傳」の最後に付せられた「乙亥の歲、秋八月」という注記をそのまま信じて、この「傳」を貞元十一年乙亥の歲に書かれたものとし、それから數年あと、元稹の「酬白學士代書一百韻」の詩に見えるような狀況のもとに、民間の語り手がそれを敷衍した物語りを語るのを、白居易と元稹とが聴いたのだとするのである。

ただこの貞元十一年という紀年に疑問があることについては、すでにいくつかの論文が指摘しているところである。戴望舒「讀李娃傳」の論文<sup>(2)</sup>をはじめ、みながそろつて言うように、貞元十一年には、白行簡は父親の喪に服しており、當時の



風習からして、服喪中にこのような「不謹慎な」戀愛小説を書いたとも思えず、また小説の中で生々と描寫されている長安の街の詳細について、この年には彼はまだ熟知してはいなかったと推定されるのである。<sup>(22)</sup> そうしたことから、戴望舒は、本文の乙亥の字を乙酉の字の誤りであろうとした。すなわちこの作品は、貞元二十一年（八〇五）乙酉の歳に書かれたと推定したのである。それに對し、卞孝萱「李娃傳の原題と著作年代」の論文は、<sup>(23)</sup> 監察御史と書かれている白行簡の官名と考え合わせて、乙亥を己亥の誤りとし、元和十四年（八一九）をその著作の年に當てている。ただ、こうしたやりかたで不都合な文字を傳寫の誤りとして改め、年代に訂正を加えて、作者の経歴との矛盾をなくするといった處置だけで問題が解決するかどうかはいささか疑問である。唐代の傳奇小説の少なからざる作品の最後（ときには冒頭部分）に付け加えられている、その作品の製作事情を説明する注記自體に、全くフィクションが含まれることがなかったかどうかの検討も不可缺だと考えられるからである。そうした注記に意圖的な虚構が加えられていたとすれば、傳寫の誤りとして本文の文字を變えて合理的な解釋を付けることは、かえって作品成立の背景を見誤ることにもなる。ただ「李娃傳」の場合に限定していえば、乙亥の字が乙酉であったか己亥であったかは別にして、私も「李娃傳」が成立したのは、新昌里で民間の藝人が「一枝花」の物語りを語るのを聴いて以後のことであったと考える。すなわち張政娘氏が考えたように、文言の作品である「李娃傳」に取材しそれを膨らませて、民間の語り手が「一枝花」の物語りを作り上げたのではなく、逆に民間の物語りである「一枝花」を基礎に、それに知識人の觀點から改變を加え文言に定着して、「李娃傳」が成立したと推定するのである。そのことは、この「傳」の内容に、知識人的な價值觀にいられた部分とともに、直接に民間傳承に由來するであろう要素が少なからず留められていることから確かめられるであろう。

それならば、現在見られる「李娃傳」の全體のうち、どこまでが民間の語りものを承けた部分であり、どの部分が知識人的な觀點から變形され、付け加えられたところなのであろう。この問題に對する、私のきわめて大雑把な解答は、李娃

が鄭生の戀人として登場している部分は基本的に民間の文藝に由來し、李娃が母親めいた相貌で鄭生を保護し養いたてている部分は知識人層の觀點が主導しているところだとするものである。下降と上昇の構造でいえば、前半の下降の過程に見えるものが主として民間文藝を基礎としたものであり、後半の上昇過程を主導しているのが知識人の論理なのだと考えるのである。

民間文藝に由來する部分を支えているのは、都市住民たちの價值觀であり、倫理觀であつたと言えよう。都市住民たちは、李娃と鄭生との戀愛に溫かい目を注いでいる。たとえば、この物語りの冒頭で、李娃と鄭生とが始めて出會う部分の、次のような記述の中にそれがよく見られるであらう。<sup>24</sup>

あるとき「鄭生は」、東市に遊んだ歸り道、平康里の東の門から坊内に入ると、西南の地區にいる友人を訪ねようとした。鳴珂曲まで來たところで、一軒の、それほど大きな門構えや庭ではないが、建物の作りはしっかりとて趣きのある家を見かけた。門扉は片方だけが閉じられ、そこに一人の美人が、鬢むすを二つ結った侍女に寄りそわれて、立っていた。そのあでやかで美しい姿は、古今に絶するものであつた。鄭生は、思いがけなくもその女性と出會うと、無意識のうちに馬を久しく留め、うろうろして立ち去ることができなかった。そこでわざと鞭を地面に落とすと、從者がやって來るのを待って、言い付けてその鞭を拾わせた、彼がいくどもその美人の方に目をやると、美人の方でもこちらを向いて瞳を凝らし、たいへん氣持ちを引かれてゐる様子であつた。しかし、けっきょくにも言い掛けることをようしないままに立ち去つた。鄭生は、それ以來、心にぼっかりと穴が開いたようになった。……それからしばらくして、「鄭生は」衣服を整え、お付きの者たちをおおぜい從えて、その家に向かつた。その門を叩いたところ、侍兒が出て來てかんぬきをはずした。鄭生が言った、「ここはどなたのお屋敷でしょう」。侍兒はそれには答えず、走つて「内に入ると」大聲で言つた、「このまえ鞭を落つことした方です」。

このような鄭生の痴とも言うべき行動を、人々が微笑をしながら受け入れていたであろうことは、門のところに出て来た侍兒の振る舞いからも窺われる。この侍兒といっしょになって、語り手は鄭生の世間知らずの戀情をいささかからかうのであるが、それは決して惡意のあるものではなく、むしろそうした鄭生に親密感を懷くが故のからかいなのである。李娃と鄭生との戀愛の物語りは、そうした語り手の背後にいた、都市住民たちを主體とする聽き手たちの全面的な支持の上に成り立っていたのだと言えよう。名族である滎陽の鄭氏（白居易の「河南元府君滎陽鄭氏墓誌銘」の言葉を借りれば、天下に五甲姓が有り、滎陽の鄭氏は其の一に居るのである）の若君と長安の街の妓女である李娃との戀愛は、士大夫層の論理が支配權を握っている現實の社會の中では成り立ちがたいものであったろう。しかし都市住民たちは、そうした現實の制限を越えて、新しい人間關係創造への希求を基盤にして自からの論理をばぐみつつあり、李娃と鄭生の戀愛に對する彼らの支持は、そうした新しい論理の内容を端的に示すものであったのである。

「李娃傳」の物語りが長安の街を舞臺にし、その舞臺と密接に關連しつつ展開していることについては、さきに妹尾達彦氏の論文を舉げて見たところである。その長安の街の、小説の中における「使用」のしかたは、單に都市的な雰圍氣をあたえるためのものではなく、より理知的なものであることに注意する必要がある。すなわち、花の都といった觀念を背景に、長安が、その外にある者の視點で描かれるのではなく、長安の街の實際を熟知した住民たちの知識を基礎に、その知識を「論理的」に（すなわち抒情に流されることなく）有効に使用しているのである。その典型となるのが、鄭生が一文なしになったとき、李娃とその假母とが、他人の邸宅を一時的に借用してかごぬけ、詐僞のようなことを行ない、彼を追い出す部分である。すでに一部引用したところではあるが、その筋書きだけを抜き出せば次のようである。

李娃は、二人に子供が授かることを祈ろうと言って、鄭生とともに竹林神のやしろへ行き、二晩お籠りをした。その歸途、宣陽里にある、李娃の伯母の家だという屋敷に立ち寄った。その家で休息しているとき、馬を馳せてやって來た者が

いて、假母が急病で命も危ういと李娃に告げた。李娃は取るものも取りあえず鳴珂曲の家に戻ることになり、鄭生もいっしょに歸ろうとするが、伯母がそれを引き留めて、善後策の相談もしたいから鄭生はこちらにのこるようにと言った。鄭生は伯母のもとに留まって李娃からの知らせを待ったが、夕方になってもなにの知らせもない。そこで鳴珂曲のものと家に行ってみたところ、門にはかんぬきがしっかりとかかり、泥で封までしてあった。隣人に尋ねてみたところ、その家はずっと借家で、期限が来て持ち主に返し、假母も二日まえにひっこしをしたと言う。鄭生は、夜になると街の往來ができぬようになることから、衣服を質に入れて、食事をとり、木賃宿で眠られぬ一夜を過ごした。次の日の朝早く、伯母の家に駆けつけたところ、そこも閉まっており、門に出て来た宦官は、ここは崔尚書の屋敷で、きのうは一日だけ庭を貸したのであるが、借りた人も夕方には立ち去った、と告げた。

このようにして鄭生は、廣い長安のまちの中で、文字通り路頭に迷うこととなる。

一文なしになった鄭生を妓樓から追いだす手段は様々に考えられたであろうし、それを實行するさいの描寫も簡単にすますこともできたはずであるが、ここでは巧妙な手段がもうけられ、それを實行するさいの細節までが語られている。このような手が使われたとき、鄭生は必然的に路頭に迷うことにならざるを得なかったことを、讀者は納得するのである。こうした描寫の背後にあるのは、抒情に流されるのではなく、より理知的な、理詰めで筋が展開することを求める精神である。吉川幸次郎教授は、かつて「中國小説に於ける論證の興味」と題する文章の中で、宋代以後の小説にしばしば見える、事態の偶然性を必然性として語る技法について分析を加えられたことがある。すなわち、小説の筋書きは偶然の事件の積み重ねの上に展開するのであるが、語り手は、偶然的な事件がいかにも必然性を持って發生したかを論證することに力を注ぎ、そうした論證の興味を軸に小説は成り立っているとされた。こうした近世の小説に特徴的な技法を支える精神が、この作品中の鄭生の追いだしの部分にすでにかいま見られるのである。

この抒情よりも理詰めによる筋の展開を求める精神は、都市住民たちの合理性を求める生活感情を基盤にしていたと考えられる。日本の例であるが、たとえば近松門左衛門の浄瑠璃作品、特に心中ものに見られるように、たしかに最後の男女の道行を描寫する部分は抒情を主とし、それが作品のクライマックスを成すのではあるが、そこに至るまでの部分では、男女が心中せざるを得なくなる過程がきわめて論理的に記されている。少なくとも筋書きの展開だけをみると、作者は、男女二人には心中をするよりほかに道がなかったことを、聴き手に理詰めで納得させようと努めているように見えるのである。おそらくは、このように筋書きの理詰めを展開を求めるのは、日本と中國との別は問わず、近世の都市住民たち、特に商人層の合理主義的な生活心情を基盤にしたものであったと考えてよいであろう。唐代の傳奇小説の、眞の意味での舞臺となる都市は、ほとんど長安だけに限られている。それは、當時、首都の長安においてのみ、近世の市民層と共通する精神風土を備えた、新しい都市住民層が一定の段階まで成長していたからであり、都市の語りものが、そうした新興の階層の價值觀を物語りとして結晶化させつつあったことの反映であったと理解できるのである。

「李娃傳」の後半部分、鄭生の境涯の上昇過程を記す部分が士大夫層の價值觀を軸にして成り立っていることは、見やすいところである。科擧の試験のための讀書につとめ、甲科に及第したあと、さらに大比に際して直言極諫科に應じて策名第一の成績をあげて、成都府の參軍の官につく。政界にあって「清顯」の職務を歴任し、四人の息子たちも大官となり、婚姻を結んだのはみな第一級の貴族ばかりであったと語る。いわば、官僚として、當時の人々がもっとも望ましいとしたであろう典型的な生涯を、鄭生は送ったとされているのである。次のように推定することができるかも知れない。すなわち、元來の民衆的な語りものにおいても、その後半に主人公の境涯の上昇を記す部分があり、民衆層の願望を託されて主人公は高位高官に昇るとされていた。しかしその上昇過程は、官位制度の實際を知る者から見れば荒唐無稽のものであった。そこでその部分が、士大夫層に屬する者によって現實に沿うよう、もっともらしく書き改められたものである、と。

鄭生の境涯の上昇過程の中であって、李娃は、鄭生がその上昇過程を過つことなくたどれるように的確な指示をあたえている。身體の癒えた鄭生に、まず李娃は、かつての科擧準備のための讀書の成果がいまなお遺っているかどうかを尋ねた上で、鄭生を書店に連れていって百金で書物を購<sup>26</sup>う。

そこで李娃は、鄭生に言つて、全ての心配事を忘れて學問に心を向けさせ、晝夜を問わず一心に努めるようさせた。李娃はいつも側に坐つて、夜半が過ぎてからやつと眠るのであった。彼が疲れたように見えるときには、詩や賦を作るようにと口ぞえをした。二年がたつて、鄭生の學問は大成し、天下の書物でひろく目を通しておらぬものはなくなつた。鄭生が李娃に言つた、「科擧に應じて學業を試してみてもよいでしょう」。李娃が言つた、「まだだめです。さらに習熟に努めて、將來の百戰を期さねばなりません」。一年がたつた。李娃が言つた、「もう問題はありません」。

このような「教育ママ」的な李娃の姿の背後には、おそらく、能力主義を基礎とする官僚層が懷く、新しい女性像があつたのであろう。しかも、さらに直接には、作者の白行簡自身の身邊にあつた白氏一族の女性たちの姿がこうした李娃の行動に反映していると推定される。白居易・白行簡兄弟は若い時代に父親を喪つた。そうした彼らを養ひ育て、基礎的な教育をあたえたのは、母親や外祖母たちであつた。白居易がその父親の白季庚のために書いた「襄州別駕府君事狀」の中で、母親のことを述べて次のようにい<sup>27</sup>う。

夫人は、潁川の陳氏で、陳の王室の宜都王の子孫である。……別駕府君（白季庚）が世を去つたとき、子供たちはまだ幼くて、師に就いて學問はしていなかった。夫人は親しく詩書を取り、晝と無く教え導き、諄々と教え諭して、ひとたびも聲を荒らば鞭を振るったりすることがなかった。十年あまりも經つ内に、子供たちはみな學問によって官途につき、貴顯の位に昇つたのであるが、まことに夫人の慈愛溢れる教えのたまものなのである。

この記述にいささかフィクションが含まれているであろうことは、父親の白季庚が死去した時、白居易は二十三歳、白

行簡は十九歳であつて、そこで始めて、母親の教えのもとに、學問にこころざしたとは考えられぬことから言つても明らかであろう。ただこのように書かれるについては、こうした母親像を望ましいものとする觀念があつたからであるに違いない。同じく白居易が、外祖母の白氏のことを述べた「唐故坊州郿城縣尉府君夫人白氏墓誌銘」にも、次のようにある。<sup>(28)</sup>

夫人は、太原の白氏……故の大理少卿・襄州別駕の白季庚の伯母、前の京兆府戸曹參軍・翰林學士の白居易と、前の秘書省校書郎の行簡の外祖母である。……「夫の」郿城府君が没すると、夫人は幼いむすめを慈しみ教えて、節操ある婦としての務めをはたした。のちに白居易と白行簡とが生まれると、夫人がかれらを養ひ育てて立派に成人させ、慈しみ深い祖母としての役目をはたした。季節ごとの祭祀を清らかに取り行ない、客人を敬し、姉妹の間に睦まじくさせ、裁縫に巧みで、琴や書を能くするなどといったことは、みな務めずしてできることであつたのである。

あるいは、同じ白居易が、親友であつた元稹の母のために書いた墓誌銘、「唐河南元府君夫人滎陽鄭氏墓誌銘」にも、次のようにある。<sup>(29)</sup>

夫人は、季節の祭禮の時にはいつも、終夜眠ることなく、料理のことや洗い物のことに、必ず自らがあたつた。暑さの盛りや厳しい寒さの中にあつても、努めて自から食事を供え、いささかも怠る様子がなかつた。夫人が誠を盡くして事をなおざりにせぬさまは、こんなふうであつたのである。元氏と鄭氏とは、ともに大きな一族がむつみあつて纏まつており、親戚關係はきわめて廣いのであつたが、そうした一族内外の冠婚葬祭の禮について疑問があるときには、みな夫人に尋ねた。夫人は、それぞれの場合を考え斟酌を加えて「意見を述べたが」、全て禮に外れることがなかつた。夫人が事理に通じていることは、こんなふうであつたのである。夫人が母親となつた時、「夫の」府君はすでに没し、元稹と元稹とはまだ幼かつた。家は貧しく、師をたのんで學問を授けてもらうことができなかった。「そこで」夫人が自から詩書を執り、教えて倦むことがなかつた。四五年の間に、二人の息子はともに經典に通じて、官途

にのぼった。元稹は、科擧に及第したあと、判の文章も合格と認められ、秘書省の校書郎を授けられた。ちょうどそのころ今の天子が位に登ると、三つの科目で對策を求めて天下の俊才を選抜したところ、合格したものが十八人あったが、元稹はその首席を占めたのであった。

こうした文章の中で、望ましい女性像として強調されている、夫の亡きあと、子供たちに自から學問を授けて官途に進ませることと、一族内を治めて祭祀を立派に執り行なうこととの二點は、そのまま「李娃傳」に反映していると言ってよいであろう。李娃が鄭生の科擧受験のために力を盡くすのは、いささか變形してはいるが、前者の反映なのであり、後者の點についても、「傳」のなかに、「李娃は、正式に鄭生と結婚をしたあと、季節ごとのお祭りには、嫁としてのつとめを立派にはたし、一族の中を治め正して、人々の敬愛を集めた」といっている。

こうした面を強調して女性たちを描いているのは、その背後に、「列女傳」などに見える賢母たちの稱揚と共通するところが多い、儒家的な倫理觀念からする女性觀があつたからであるに違いない。しかし同時に、母親が自から詩書を執つて子供に教え、その結果、科擧の及第と官途での昇進が實現されたと強調しているところに、科擧制度を基盤とした新進官僚層の意識の反映を見ることができよう。「世說新語」に見られるような、古い倫理觀とは無縁に個性を主張する六朝期の女性たちとは別の女性觀が社會の主流になりつつあつたのである。それがいささか復古の氣味を帯びるにしても、唐代古文運動の復古と同様に、新しい時代に對應するための、形としての復古であつたのだと言えるであろう。

「李娃傳」の後半部分に見える、新しい官僚層の價值觀を反映したと考えられる李娃像は、前半の都市住民層の支持の下に成長したであろう李娃の像に較べて、格段にその魅力が落ちることは、誰もが認めるところであろう。著者もそのことを意識していたのであろう、後半部分の記述は、はなはだおざなりである（もちろん、陳翰がこの作品を「異聞集」に収めるに際してこの部分を節略した可能性も否定できない。その場合でも、士大夫層の一員である陳翰が後半部分をおも



しろくなくと考えたということに変わりはない)。こうしたことから、唐代傳奇小説が備える生命力が、基本的には、都市生活者たちの価値観の中に由來するものであったことが確かめられるのである。

このように「李娃傳」の、前半の下降過程と後半の上昇過程とが、基本的には、前者が都市住民たちの物語りに由來し、後者が新しい官僚層の価値観を基礎にして描かれていたことが知られた。「李娃傳」の内部的な矛盾の相當に大きな部分は、この「傳」が内部に二つの違った価値観を併存させていることから説明されるであろう。それならば、このような下降と上昇との二つの過程に象徴される、性格の異なる二つの要素を一つに結合している、さらに大きな枠組みは、なにに由來するのであろう。すでに検討したように、この大きな枠組みは、古く遡って、季節の循環に對應した植物的生命力の下降と再上昇、すなわち穀靈の死と再生の神話的な傳承に由來すると推定された。したがって、都市市民たちと士大夫層との物語りの下層に、その基盤として、隠れたかたちで農耕信仰に由來する神話的な傳承があって、それがその上部の、少なからず価値観の異なる二つの物語りを一つに結合させていたと考えることが可能であり、基本的にはそうした三重構造の圖式でこの物語りの基礎的な構成を理解して間違っていないであろう。しかも、この「李娃傳」の場合には、より具體的に、そうした神話的な傳承がこの物語りに流入した経路が推定できそうなのである。

「李娃傳」の主人公の鄭生は、滎陽の豪族である鄭氏の若者だとされているのであるが、物語り中の鄭生とその父親との人物像が、果たして當時の滎陽鄭氏に屬する具體的な人物を反映したものであるのかどうかについては、古くより議論のあるところである。すなわち彼らに特定のモデルがあったのかどうかという問題である。古くは宋代の「劉克莊詩話」が引く、鄭生が鄭畋で、その父親が鄭亞だとする説から、最近ではダッドブリッジ (G. Dudbridge) 氏の『李娃の物語り』<sup>(30)</sup> が推定する、鄭生を鄭雲逵ら鄭氏の三人兄弟の複合した人物像だとする説まで、さまざまな人物比定がなされて來た。

白居易と白行簡との兄弟が幼い日々を過ごした新鄭の地は、滎陽の鄭氏の本據地の一つであった。新鄭の地がなお鄭氏と密接な関係を持っていたであろうことは、たとえば、白居易が書いた「故潯州刺史贈刑部尚書滎陽鄭公墓誌銘」の中に、「鄭公が世を去ってからほとんど三紀に及ぶ月日がたったが、一族も國家も多事であつて、歸葬することができずにいた。元和某年某月某日になり、ここに始めて柩を鄭州新鄭縣の某原に移して、秘書郎であつた亡き父親の墓域に柩葬した。二人の夫人もそこに葬られた」とあることから知られる。さらに加えて、白居易の親友であつた元稹も、その母親が滎陽の鄭氏の出であつたことは、その墓誌銘を引いて、すでに見たところである。このように白居易兄弟は、滎陽の鄭氏の内でも特定一派と特に親しい關係にあつた。<sup>(9)</sup>「李娃傳」の主人公の鄭生の人物像の中に、鄭氏の特定の人物（あるいは人物たち）の姿が反映している可能性も少なくはないと考えられる。ただ逆に、この作品が白行簡によって書かれたという前提に立つかぎり、鄭氏との親しい關係からいって、鄭氏の若者の不行跡を非難することを目的として「李娃傳」が書かれたのだとする諸説は、いささか成り立ちにくいであろう。

私はむしろ、ダッドブリッジ氏がすでに指摘しているところであるが、「李娃傳」と「春秋左氏傳」隱公元年に見える鄭の莊公とその母親の武姜の物語りとの關係に注目したいと思う。「左傳」隱公元年の鄭の莊公の物語りは、「左傳」の冒頭に見えて周知のところであるが、その粗筋だけを記せば、次のようである。

鄭の武公は、申の國からきた武姜という女性を妻に娶り、その間に寤生（のちの莊公）と共叔段とが生まれた。母親の武姜は、兄の寤生を嫌い、弟の共叔段を溺愛して、段を太子に立てたいと望んだ。武公が死んで、莊公が位につくと、武姜は段のために、その領地として京（滎陽の京縣）の地をあたえるようにと請うた。臣下たちは大きな領地をあたえることに反對をしたが、莊公は、母親の言葉を容れて、それをあたえた。段は、さらに勝手に土地の併合を行ない、最後には母親の手引で鄭の都に襲撃をかけようと計った。莊公が反撃を加えると、京の人々までが段に背き、

段は共の國に亡命をした。

莊公は、弟とともに反亂を圖った母親の武姜を城潁の地に押し込めると、「黃泉に行かぬうち(死なないかぎり)は、再び母親とは會わない」との誓いを立てた。しかしやがて母親と會いたいという氣持ちがつのったが、誓いがあるために會うことができなかった。そのことを聞いた潁考叔が助言をした、「黃泉にまで及ぶ穴を掘って、そこで母上とお會いになれば、誓いに背いたことにはならないでしょう」と。莊公はその言葉に従った。莊公は、潁考叔が言うようにして掘られた穴に入ると、唱った、「大隧の中、その樂しみは融融たり」と。武姜が出て來て、唱った、「大隧の外、その樂しみは洩洩たり」と。このようにして、もとどおり母と子との關係に戻ったのである。

ダッドブリッジ氏は、この物語りの最後に置かれた「遂に母子たること初めの如し」の一句を承けて、「李娃傳」の中の、劍門において鄭生が父親と再會する場面に見える「吾と爾なんじと、父子たること初めの如し」の句があるのだと推定している。私はさらに一步推定を進めて、こうした「左傳」の利用の基盤には、滎陽鄭氏内部の傳承があったのだと考える。

この「左傳」の物語りは、鄭の王族をめぐる故事であった。そうして滎陽の鄭氏は、この鄭國の王族の子孫だとされる。「新唐書」宰相世系表は、鄭氏の系譜について、次のようにいう。<sup>32)</sup>

鄭氏は姬姓から出た。周の厲王の末息子末子の姬友が鄭の地に封じられた。これが鄭の桓公である。そのときの封地は、「今の」華州の鄭縣の地にあたる。桓公は、武公を生んだ。その武公は、晉の文侯とともに周の平王を補佐し、都を東方の洛邑に遷すのに盡力をした。「このとき、鄭國も」溱水・洧水あたりに國を移し、これを新鄭と呼んだ。その地は、河南の新鄭がこれにあたる。その十三世の孫の幽公が、韓のために國を滅ぼされ、子孫たちは陳から宋のあたりに移り住み、國の名を取って鄭氏を名のった。

このように、滎陽の鄭氏はその祖先を鄭の王族に仰いで、鄭の姓を名のるのもそれに由來するのであり、その本據地の

滎陽も鄭國の故地にあった。おそらくは鄭氏一族の内部で行なわれていた祖先をめぐる傳承の中にあって、鄭國の王族に關する傳説も、一族の神話時代を語るものとして一定の比率を占めていたであろう。そうした豪族内部のその祖先に關する傳説が、歴史書に見えるものと重なり合いつつも、いささか異なった内容を備えていたことについては、唐代の太原の王氏をめぐる傳説（特に王子喬の傳説）について、かつて考察を加えたことがある。<sup>(33)</sup> なお確かめなければならない點は多いのであるが、「左傳」隱公元年に見える鄭の莊公とその母親との物語りも、いささか變化を加えつつ滎陽の鄭氏の内部に脈々と語り伝えられており、くわえて、白居易兄弟と鄭氏の人々との親しい交わりを通じて、その傳承が「李娃傳」に流れこみ、物語りの基礎構造となったと假定することができれば、その推定は、李娃と鄭生の物語りの原型を考えるに際して、大きな手がかりをあたえてくれることとなる。

鄭の莊公と武姜の傳説もまた母親と息子との乖離と再會の物語りである。再會をするのは黄泉の世界においてであった。二人が唱う歌の中に「大隧」とあるように、その黄泉の世界とは具體的には墓中の世界（隧は墓道の意であり、大隧の中とは墓中の世界を指している）のことであって、そこで母と子が再會をし、二人して現世に戻ってくる。母と子は、その大隧の中で歌のかけ合いを行なう。これは一種の歌垣であり、歌垣が一般にそうであるように、その行事を通じての男女の性的な結合が背後で豫想されていたであろう。二人は母子であると同時に戀人の關係にもあったのである。そうして二人の性的結合が、現世に戻るための必須の條件となっていた。この物語りの背後に、地中（死者の世界）に神が籠ってしまつたため、現世における生命力が衰え、その狀況を打開するために別の神や英雄が地下にもぐり、籠っていた神を地上に連れ戻す、そうすることによって地上に再び生命力が甦るといふ、季節の循環と農耕儀禮にまつわる全世界的なシナリオを見ることがそれほど困難ではないであろう。<sup>(34)</sup> そうして、おそらくは「李娃傳」の中の、天門街における東西二肆の歌合わせという筋書きにも、古い歌垣の傳承が遙かに反映しているのである。

このように見てくるとき、「左傳」隱公元年の武姜と鄭の莊公の物語りと「李娃傳」とを關連づけて分析することが、それほどとつびではないことが理解されよう。しかも兩者の間を結ぶものとして、滎陽の鄭氏一族の内部的な傳承を想定することができるのである。すなわち、「李娃傳」の基本的な枠組みをなす、下降から上昇へという構造全體を支えているのは、古い農耕儀禮に起源する、母子神の信仰にまつわる死と再生の傳承なのであり、そうした傳承は滎陽の鄭氏内部の傳説として、さまざまな變形を受けつつも唐代にまで受け繼がれていた。このような古い神話的な傳承の上に、長安の都市住民たちの物語りである「一枝花」の語りものが乗っかり、さらに新しい官僚的士大夫層の價值觀からする變形がそれに加えられて、「李娃傳」は成立したと、いささか圖式的になるきらいはあるが、理解することができるのである。

唐代傳奇小説の作品群は、短編小説の一ジャンルとして完成した姿を示している。そうした完成は、都市生活者たちの物語りを基礎にしながら、士大夫層の文體がそれを的確に纏めるといふ、二つの階層の共同作業の上に支えられていた。士大夫層を中心にしていえば、彼らの心中に都市生活者たちの價值觀に共感しえるものがあり、その共感を核にして民衆的な物語りを文字に定着したのであった。ただ彼ら自身の價值觀は、「李娃傳」後半部分の分析からも知られるように、新しい物語りを構成できるような活力には乏しかった。中國の小説史の主流は、唐代傳奇的、士大夫層と都市住民たちとの幸せな共同作業の時代を過ぎたあと、宋代以降、都市市民自身が彼らの文體で自からの價值觀を結晶化させた物語りを定着すべく努力を重ねる時代に入るのである。

## 注

(1) 人物形象論については、李希凡『論中國古典小説的藝術形象』一九六二年増訂本（上海文藝出版社）が、その方法の成果を示し、同時にその限界をも示していると言えよう。

(2) たとえば、卞孝萱『《李娃傳》的原標題及寫作年代』（《唐代文史論叢》一九八六年、山西人民出版社、所收）。

(3) 「李娃傳」のテキストは、「太平廣記」卷四八四および「類說」卷二八に收められた「異聞集」（唐末の陳翰の編、原本は傳わらない）の引用

が主要な原據となる。それに校訂を加えたものとして、魯迅『唐宋傳奇集』第三分(それに付録された「稗邊小綴」の解説も参照)、香港中華書局編『唐人小說』一九六六年、王夢鷗「陳翰異聞集校補考釋」(『唐人小說研究二集』一九七三年、藝文印書館、臺北、所收。この考釋には排印の際のミスが多いので注意が必要)、徐士年『唐代小說選』一九八二年、中州書畫社、鄭州、G. Dudgeon "The Tale of Li Wa" (後引) など多くのテキストがあるが、内容に大きな差異はない。またこの作品に詳細な注釋を加えたものとして、周紹良『汧國夫人傳』箋證(『趙景深編『中國古典小說戲曲論集』一九八五年、上海古籍出版社、所收)が特に有用である。以下に引用する原文は、主として中華書局排印本「太平廣記」に據り、「類說」などで校訂を加えたものである。

(4) 予伯祖嘗牧晉州、轉戶部、爲水陸運使、三任皆與生爲代、故語詳其事、貞元中、予與隴西公佐話婦人操烈之品格、因遂述汧國之事、公佐拊掌竦聽、命予爲傳、乃握管濡翰、疏而存之、時乙亥歲秋八月、太原白行簡云

(5) 乃密徵其友遊長安之熟者、以訊之、友曰、此狹邪女李氏宅也、曰、娃可求乎、對曰、李氏頗瞻、前與通之者多貴戚豪族、所得甚廣、非累百萬、不能動其志也、生曰、苟患其不諧、雖百萬何惜

(6) 乃置層榻于南隅、有長髯者、擁鐔而進、翊衛數人、於是奮髯揚眉、扼腕頓顙而登、乃歌白馬之詞、恃其夙勝、顧盼左右、旁若無人、齊聲讚揚之、自以爲獨步一時、不可得而屈也、有頃、東肆長于北隅上設連榻、有烏巾少年、左右五六人、乘襲而至、卽生也、整衣服、俯仰甚徐、申喉發調、容若不勝、乃歌蓮露之章、舉聲清越、響振林木、曲度未終、聞者歔歔掩泣

(7) たとえば、張友鶴『唐宋傳奇選』一九七九年、人民文學出版社、は、「李娃は、假母の壓力のもとに、彼女と共同して榮陽生(鄭生)を欺き捨てた。しかし一旦、後悔をしてからは、ほんとうに彼を愛し、一切を犠牲にすることも惜しまず、惡辣な封建勢力と戦い、戀愛の自由を

勝ち取った……」と解説している。

(8) 娃下車、驅逆訪之曰、何久疎絶、相視而笑、娃引生拜之、既見、遂偕入西戟門偏院、中有山亭、竹樹葱青、池樹幽絕、生謂娃曰、此姨之私第耶、笑而不答、以他語對

(9) 此良家子也、當昔驅高車、持金裝、至某之室、不踰期而蕩盡、且互設詭計、捨而逐之、殆非人行、令其矢志、不得齒于人倫、父子之道、天性也、使其情絶、殺而棄之、又困頓若此、天下之人盡知爲某也、生親戚滿朝、一旦當權者熟察其本末、禍將及矣、況欺天負人、鬼神不祐、無自貽其殃也

(10) 妹尾達彦「唐代後半期の長安と傳奇小説——『李娃傳』の分析を中心にして」日野開三郎博士頌壽記念論集、一九八七年、中國書店、所收。

このほか、妹尾氏の「唐代長安の街西」史流二五號、一九八四年、「唐代長安の盛り場(上・中)」史流二七・三〇號、一九八六・八九年、などの論文も、傳奇小説を讀むに際して參考に資するところが大きい。

(11) 父責曰、志行若此、汚辱吾門、何施面目、復相見也、乃徒行出、至曲江西杏園東、去其衣服、以馬鞭鞭之數百、生不勝其苦而斃、父棄之而去、其師命相狎昵者陰隨之、歸告同黨、共加傷嘆、令二人齋葷席瘞焉、至則心下微溫、舉之、良久氣稍通、因共荷而歸、以葷筒灌之、經宿乃活

(12) 橋本堯「『李娃傳』のモチーフ」小尾博士古稀記念中國學論集、一九八三年、汲古書院。

(13) 石田英一郎「桃太郎の母——母子神信仰の比較民族學的研究序說——」『桃太郎の母』一九五六年、法政大學出版局、所收、のちに、『全集』第六卷。

(14) 石田英一郎 同上書所收。

(15) W. Max Müller "Egyptian Mythology", Mythology of All Races vol. 12, 1918, Cooper Square Publishers, New York, などを参照。

(16) 張政娘「二枝花話」中央研究院歷史語言研究所集刊二〇本下、一九四九年。

- (17) 元稹「酬翰林白學士代書一百韻」自注（元稹集卷十、中華書局、一九八二年、中國古典文學基本叢書本）  
樂天每與予游從、無不書名屋壁、又嘗於新昌宅說一枝花話、自寅至巳、猶未畢詞也
- (18) 花房英樹『白居易研究』一九七一年、世界思想社、所收。なお白居易の住居については、王拾遺「白居易兩京宅第考」社會科學戰線一九八一—二、も参照。
- (19) 「類說」卷二六上（北京圖書館本）  
舊名一枝花、元稹酬白居易代書一百韻云、墨頭名盡、光陰聽話移、柱（注）云、樂天從遊、常題名於柱（壁）、復本說一枝花、自寅及巳
- (20) 羅輝「新編醉翁談錄」癸集卷一  
李娃、長安娼女也、字亞仙、舊名一枝花、有蔡陽鄭生、字元和者……
- (21) 戴望舒「Note sur le Li Wa ichouan（讀李娃傳）」、漢學論叢（Melanges Sinologiques）、巴黎大學北京漢學研究所、一九五一年。
- (22) 白行簡の經歷については、内山知也『隋唐小説研究』一九七七年、木耳社、第四章第六節、に詳しい。ちなみに、内山氏は、杜佑らの妾が國夫人に立てられたことが「李娃傳」成立の基礎になったであろうと推定している。
- (23) 卞孝萱「李娃傳の原標題及寫作年代」（前掲）。
- (24) 嘗遊東市還、自平康東門入、將訪友于西南、至鳴珂曲、見一宅、門庭不甚廣、而室宇嚴邃、闔一扉、有娃方凭一雙鬟青衣立、妖姿要妙、絕代未有、生忽見之、不覺停驂久之、徘徊不能去、乃詐墜鞭于地、候其從者、勅取之、累眄于娃、娃回眸凝睇、情甚相慕、竟不敢措辭而去、生自爾意若有失……他日乃潔其衣服、盛饗從而往、叩其門、俄有侍兒啓局、生曰、此誰之第耶、侍兒不答、馳走大呼曰、前時遺策郎也
- (25) 吉川幸次郎「中國小説に於ける論證の興味」『中國散文論』所收、のちに『全集』第一卷）。
- (26) 因令生斥棄百慮以志學、俾夜作畫、孜孜矻矻、娃常偶坐、宵分乃寐、伺其疲倦、即諭之綴詩賦、二歲而業大就、海內文籍莫不該覽、生謂娃曰、可策名試藝矣、娃曰、未也、且令精熟、以俟百戰、更一年、曰、可行矣
- (27) 白居易集卷四六（一九七九年、中華書局本）  
夫人顏川陳氏、陳朝宜都之後……及別駕府君即世、諸子尚幼、未就師學、夫人親執詩書、晝夜教導、恂恂善誘、未嘗以一呵一杖加之、十餘年間、諸子皆以文學仕進、官至清近、實夫人慈訓所致也
- (28) 白居易集卷四二  
夫人太原白氏……故大理少卿襄州別駕白諱季庚之姑、前京兆戶曹參軍翰林學士白居易、前秘書省校書郎行簡之外祖母也……洎郾城歿、夫人撫訓幼女、爲節婦、及居易行簡生、夫人鞠養成人、爲慈祖母、迨乎潔蒸嘗、敬賓客、睦娣姒、工刀尺、善琴書、皆出於餘力焉
- (29) 白居易集卷四二  
夫人每及時祭、則終夜不寢、煎和滌濯、必躬親之、雖隆暑盛夏之時、而服勤親饋、面無怠色、其誠敬有如此者、元鄭皆大族好合、而姻表滋多、凡中外吉凶之禮有疑議者、皆質於夫人、夫人從而酌之、靡不中禮、其明達有如此者、夫人爲母時、府君既沒、積與積方齟齬、家貧無師以授業、夫人親執詩書、誨而不倦、四五年間、二子皆以通經入仕、積既第、判入等、授秘書省校書郎、屬今天子始踐祚、策三科、以拔天下賢俊、中第者凡十八人、積冠其首焉
- (30) Glen Dudbridge, "The Tale of Li Wa", Oxford Oriental Monographs No. 4, 1983, Ithaca Press, London.
- (31) 白居易が墓誌銘を書いた滁州刺史榮陽鄭公の息子の鄭雲達と元稹の母親の鄭氏とは、ともに鄭氏一族のうち、北祖第七房に屬し、雲達の祖父と鄭氏の曾祖父とが兄弟であったと推定される。しかも鄭雲達は、鄭氏の夫の元寛のために、その履歷を記した文書を作っていたことが、白居易の墓誌銘から知られる。元氏を含めてこの二つの血筋が密接な交わりを持ち、白居易もその交友關係のなかに参入していたのである。

(32)

なお、滎陽鄭氏の系譜については、愛宕元「唐代滎陽鄭氏研究——本貫地歸葬を中心にして」人文三五集、一九八九年、に詳しい。

「新唐書」宰相世系表卷七五上

鄭氏出自姬姓、周厲王少子友、封於鄭、是爲桓公、其地華州鄭縣是也、生武公、與晉文公夾輔平王、東遷于洛、徙溱洧之間、謂之新鄭、其地河南新鄭是也、十三世孫幽公、爲韓所滅、子孫播遷陳宋之間、以國爲姓

(33)

小南「古鏡記をめぐる——太原王氏の傳承」東方學報第六〇冊、一九八八年。

(34)

大地母神をめぐる信仰と再生の觀念との結びつきについては、すでに多くの論考がある。Mircea Eliade "Patterns in Comparative Religion", (フランス語版原本、一九六三年) 第八・九章 Joseph Campbell, "The Masks of God: Primitive Mythology", 1959, Penguin Books, 第二章 第五節、などを参照。